

昭和二十四年七月二十五日發行  
第三種郵便物認可  
(毎月一回、十五日發行)

(通第一三二号)

# 慈

# 光

第十二卷

第二號

## 目次

宿業論(歎異抄第十三章)……………	近角常観……………(1)
善知識を訪ねて……………	福島政雄……………(7)
池山先生講話抄……………	松本解雄……………(11)
永遠に亡びぬもの……………	東昇……………(14)
善と悪との問題……………	花田正春……………(17)



## 一 仙台第二中学の悲惨なる事件

人生の事、何から何まで宿業であるという、唯そうした一片の理屈のように取り易いのであるけれども、之は實際上よく味わわして貰わなくてはならぬ。私は今度仙台求道会へ参つて帰つて来たのである。処が新聞誌上でも御承知の如く、

仙台第二中学の生徒が山形県蔵王山に行軍して起つた悲惨な出来事に就いて、同地の人々は著るしき刺戟を受け、ふそれについて承ることが多かつたのであつた。

それは、その日が非常な雨の、寒さきびしい日であつた。その中すべてで九人の人々が、山上で行き迷い、石室に閉じ籠り、避難して居つた処が、その中次第に劇しき降雪となり、雪のためにどうにも仕ようがなくなつた上に、一方食事も尽き果て、終に九人の人々が餓死するに至つたという出来ごとである。そのことが多くの人々の胸を刺戟

し、何時しれぬという感じてよく聞いて下された方が多かつたと共に、またそのことに關し、色々の評論があつて、一面非難する人は甚だ用意が足らなかつたとか、甚だしきは陸軍の人などは實地にその地を踏査して、かくの如きは専門の軍隊と雖も敢てせぬ無謀の企てであつたとか、色々議論も多かつたことであつた。

又四人附いて行つた教員の中二人は一緒に亡くなつたのであるが、遺つた二人の人達は、自らも面目無いと悲しみ、世間からも弁解するをすら許さぬという有様で、その人達の心事に立ち入つて見れば、不幸なりし学生達の遺族に對し、如何ほどに心苦しかつたことであろう。現に「何故自分達も、他の人々と一緒に死な無つたらう」との愚痴が出て居ると云う有業で、為に各部に著しき衝動を与え、色々の議論も多かつたことであつた。

しかしこれに對し信仰上より考えようと、それは成る程「こうもすれば助かつたらうに」との愚痴もあるうし、又

「こうして行けばよかつたらうに」の思いもあることであるけれども、結局、皆あとより考えることで、

要するに、そういうようにしか出来得なかつたことが事實、そうより仕方の無つたことが事實故、そこに眼を着けなくてはならぬ。それは成る程人間としては「こうもやれそうなものあも出来そうなもの」と非難も出てくるし、又自分としても、そうし得なかつたことを悲しむ愚痴の出て来るは尤もであるけれども、しかし結局どう思つても、その時、その場合、そう出来得なかつたことが事實。故に私は今回仙台においては、この事につき、

これをあゝこう批評しているのは、甚だ呑気な沙汰である。それより、そういう起るべからざる事が起つて来る、そこに氣をつけなくてはならぬことを申して来たのである。殊に今回はこの事に促されて聞きに來られた青年も多かつたので、それが一々みな尤もなことを言われる。

或は「自分が病身故、勉強中に仆れることがあるまいか」とか、「兄弟が皆仆れたから、自分もそういうことになるまいか」とか。

或は「自分は責任上どうしても仕遂げなくてはならぬのだが、それが仕遂げられそうに思われぬ」とか、一々青年の方としては無理なき悩みであられたのである。

私はこれに對して「成る程、諸君がその如く、斯くあり

度い／＼と望まざるは尤もであるけれども、併し、その有り度い／＼と望まざる方角からは、信仰の話は出来ぬのである。それはあり度いと願わることが、必ずしも出来ぬとも言わぬが、出来るとも言えぬでないか」と申して、故に、これに對するお慈悲の御真意を申し述べて来たことであつた。

## 二 唯宿業と考えただけでは解決にならぬ

これはかく我々の外界に現われて来る事柄から我々の宿業として仕ようが無いばかりでなく、内界に於ける我々の心の思いも、思うごとくには一つもなり得ぬのである。

早い話が、人に不足思うまいと思つても、どうしても思ひ止まらぬ。先ず多くあることと言うならば、問題は自分の方よりも外界の方が先になつて現われて来ることが多いのである。例えば今の悲惨なる出来事の場合、如きばかりでなく外界の我に對する仕打ちが、自分に満足出来ぬとか、即ち問題は明らかに外界に於ける人の我に對する態度として現われて来るのであるも、それが一つ起つて来ると、最早それが我々の内界における不平不足の事實となりて、如何にしても取り去ることが出来ぬとなつて来るのである。かくの如き時に我々は

何事も宿業、因縁、約束と考へて、而も唯いたずらに外界の善し悪しを言うてゐることはある。併しそれだけでは何



にもならぬで無いかと申すのである。

それでは結局、自分はよいが、外界がいかにぬというだけになつて、本当の安心にならぬ。故にここをもう一步進みたいものであると思ふのである。

それは成る程人間故、外界には気の合う合わぬ、色々不愉快な事柄も現われて来る。併しそれに対して不足言うとか、隔てするとか、腹立てるとか、それは此方がすること、勿論、皆様の言われるのは、信仰を聞くとして言われるのであつて、殊には、聞く程のお方が言われる訴え故、皆様の言われる方に理屈、筋道はあつてと思ふ場合は多いのである。それは苟も信仰聞く程の方は、皆理想的に考へて居られるから故、そこになると世間は思惑通りに行こうというのであるし、皆様の理想、筋道に向われるの故、世間的に言へば皆様の言われる方に道理、理屈のあることは分つて居るのである。併し、理屈はあつても結局それが自分の理屈で、それだけ向うが悪いと考へて居る段は、皆同じく考へて居るとなつて居るのである。

三 心が思うようにならんのなら  
そこになると、私常に思うのであるが、どうも私の話は

それは大低の方が「世間が悪い、しかしそう云う悪いことに遇うのがそれが因縁、約束、業報だ」と大低の方がそれで終つてしまつてあるらしい。

処で私の「待て待て！自分は自分を犠牲にしてやつてゐると言うて居ながら、さて自分のやつて居るのを人が見つけれぬとか、これでは自分が何処までも人の下敷きになつてしまふばかりであるとか、こうした不足の出で来るは今までのが、実は人に見て貰いたいため、人に認めて欲しさが先きになつてやつて居つたからで、こんな心持ちでやつて居つたのを、犠牲、献身などとは言えぬ」と。

こは恐らく誰方にも言えんならんことであらうと思ふのである。私共自身が正義、潔白でやつて居る時に、それは誰に認めて貰いたいのか、世間に、……必ずしも関係ある友人、係り合ひの者とかに限らぬ、極めて漠然ながら、周囲とか世間とかに見て貰いたいの心がある。

処がそれが何時までやつても外界に見てくれるというところが無いから、不平不足となつて表われて来る。するとその心は即ち一個の名誉心、人に善く思われたさの心、なる程、今までの心でやつて居て、自分は献身的だのと、そういう思いで人に向つて居つた自分が悪かつた、と、ここで私は自分の悪しさに転んで来たのであつた。もつともこれなども普通に言へば世間に理触されなかつたの間

世間と皆様を、調和させるよりも、色々言うて偏狭ならしむる方にあるらしい。

世間はいつでもこうでもやつて行けばよいといふのであるし、皆様のはどれだけやれても真実にやれぬといつて苦しまるるのであつて、ここ信仰、理想を言う者ほど、今日世間とよけ調和が出来なくなつて居るといふ状態である。それは世間と向う方角が違ふの故、本来調和せぬわけである。

がしかし、それにしても世間でそうだからとて、こちらが不足を起し、隔てをやつて居るのは、矢張りいかぬとなつて来るのである。これは元来、私自身が精神問題として信仰に触れ出したのがこれが本であつたので、いつも言う如く、私としては初めは何処までも真面目にやり犠牲的、献身的にやつて居る積りであつたのであるが、処が自分がその如く何程やつても「人はその如く自分に向つて来ぬ。自分のやつて居るのを見て呉れぬ」と、そうした心の状態になり、段々不足を持つようになつたのであつた。然し初めの間は、私はそう思うて居る自分が悪いのだとは思つて居なかつた。矢張り人が悪いのだと思つて居た。即ち信者の人がここに止まつて居られはせぬかと思つたのである。

題に過ぎないのであるけれども、併しそうなる私の不平不足の心、今までのこと取り返したく思う私の心なるものが、「成る程この心だもの、今までの事よく出来て居なかつたわけ」と、茲で、過去も、現在も残らず皆暗黒、残らずがみな自分の悪しきの問題となりて、何程引き戻したく思つても

最早や何ともして見よう無くなつてしまつたのである。で、さきにも云う如く、我々の外界が思うようにならぬばかりでなく、我々の心が、かく一分一厘思うようにならぬ、という。

ここが我々自己の問題に響いて来ねば、宿業とある本當の意味合ひは頂くことが出来ぬのである。

#### 四 人生の絶対消極面

それは外界の問題でも自己に響くことはあるけれども、その方はまだ考え易い。一番困るのは「自分が思うように人に隔てをせぬようにしよう」とか「人の善し悪し言うて居るべき時で無い。人に係わらず、不足出さぬようにしよう」とか、そこになれば、然うさえ出来れば、我々その境遇に於て満足が見出せるわけなれば、そこになると我々の考は、その一点に集中して居る。しかも何程思つてもその思いが止まぬとなつて来るのである。そこがこの話



は、御一人御一人のお心持ちもあることなれば、それによくはまるように聞いて頂かなくては。成る程手軽に『自分はよくしているのだけれど、人がよくせぬ。併し、これも因縁、約束』と、それも一種の見ようであるかも知れぬ。しかしそれでは何時までも『自分は善いが人が悪い』になりて、

それで真の平安が得られるかと申すのである。それはなる程、常識上、人が悪しき場合は幾らもある。ありてもそのために不足が出て、こちらが苦しむとなれば苦しまねばならぬこちらに病根はあるわけである。故にそこに目を着けて来なくてはと申すのである。

マア問題は色々ある。色々に申さなければならぬが『今自分は病氣、治し度い。親あり、子あり、死んではならぬ』の問題となれば、如何にも生命の問題故大問題である。又『自分はこうさえあれば満足だが、こころ一つあるがために満足を妨げられる。これさえ無かつたらよからうが』と。この場合には、この一つのために全幸福を碎かれて居るのである。而も何程悶えても、その一つが無くなし得ぬのである。

又或人は『境遇のことは仕方がないとしても、如何なる場合にも不足さえ出さえ出さえせねば通れる故、そう云う風にありたい』と思うても、そのこと一つがあり得ぬのであ

にならぬとは、斯く事實に突き当たつてしまつて居るのである。それを  
それだからこの上どうか思うようにしてという事はあ  
るべきで無い。

それを言うていると、その上／＼と何処までも切り無しに豎に積み立てるばかりとなつて、満足される時は無いことになつてしまふのである。

又修養の立場から言うても『人は如何にもあれ、自分は何処までも敵を愛して行く』……それは善を行つてよくよくよい。処がそれが実際に出来て満足されるのか。よし出来たとしても、それから来た満足ならば、

る。総て我々の問題は、外界と言わず、内界と言わず、我々のこうありたい、ありたいままではあるも、その先は皆行き詰つてしまつて居るとなつて居るのである。

### 五 真の宗教、偽の宗教

そこで皆様に、こは甚だ消極的なようであるけれども、信仰上の満足なることは、それは自分の思うようになりて満足することでも無く、自分の心が善くなる方で満足することでも無いのである。随分世間の宗教では

『斯くあれかし。あゝあれかし』

と、祈りて行く処の宗教もある。必ずしも低級なこの世の利を得ることを祈る教ばかりでなく、自分が長生きして親に仕えたいとか、友人隣人の為に斯く／＼尽したいとか、但しは神の恵みで正しき道を辿り度いとか、随分美わしき人情の上より尊き祈りを立て、行く処の教もある。

それは如何にも美わしきようであるけれども、それは如何にも宗教にならぬ。それは人生に持つていつての満足である。それでは真の意味での宗教とはなり得ぬのである。そこは能く見なくてはならぬ。そこになると仏教は

一切の法は夢と幻と響きとの如しと覺了して、諸の妙願を満足して、必ず是くの如きの刹を成せん。と大經にある。この世は夢、まぼろし、ひびき。思うよう

私は善く出来たの不徹底なる自己満足に過ぎないのである。人からいじめられるだけいじめられ、忍べるだけ忍んで居て、俺はこれだけ忍べたというて居るだけに過ぎぬことになつてしまふのである。

ですべてかく問題は我々の見込み通りには一つもいゆかぬ。卯の毛、羊の毛のさき程も『思うようにはゆかぬ』に、つきあつてしまふに決つてるのである。

処が仙台で今の悲惨なる出来事に関連し、しきりにこれを言うたのであるけれども合点して貰えぬ。そこで親鸞聖人の『歎異抄』十三章を持ち出してお話をした来たのである。(大正八年の求道より。) 未完

## 善知識を訪ねて

福島政雄

善財童子物語の続きを申し上げておりました。たしか昨年の秋は火の中に飛び込むバラモンの話、そこまで申し上げたかと思ひます。で善財童子は自分もそのバラモンの通り山に登つてその火の中に飛び込む、そしてそこに悟の心

が開けた事を申し述べたかと思ひます。今日はその続きであります。そのバラモンが「自分はこういう事を体験して居るだけだ、これから又南の方を訪ねて行つたらいいでしょう。南の方に一つのお



城がある、お城というのがこれは都と言うようにとつてよ  
さそうであります。師子頻申ししうしんというところがある。そこに  
王様があつてその王様の名前は無畏星宿幢むゐしゆくどうというむつかし  
い名前であり、その王様に童女どうじよがあり、その名を慈行、慈  
悲の行と書いてある幼い女の子がある、そこへ訪ねて行つ  
たらよからう」と教えるのであります。

### 純眞の童女

そこで善財童子はバラモンに別れて参りますが、善財童  
子の心境は更に段々に深くなつてまいります。その深くな  
つた心持というものは無障礙むじやうばい智常ちじょうとありますから、何もの  
にもさまたげられない智慧ゐぢというものが始終あらわれてい  
るというような心持に深くなつたというのであります。そ  
れはそうでありましょう。今の剣の山のようなものに登つ  
て其処から火に跳び込むという事を実行したのであります  
から、如何なるものにも妨げられぬという智慧が開けたわ  
けであります。そして一切色々の姿容すがたを見ると差別がある  
けれども丁度影法師かげぼうしの様なものである、こういう事を知る  
ようになつたと、こう言う事を述べられてあります。

さていよいよ今の王女を訪ねてまいりますと、その王女  
は王宮にいて五百人の童女と一緒に居つてもらつて、もし  
てその五百人の女の子にまことの道を説いているのであり

のであります。五・六歳から十二・三歳頃でありますとま  
だ心持が純である、純でありますと一切の世界というもの  
が曲つた世界にならずに、色眼鏡いろめがねで見るということになら  
ずに、そのままに一切の世界が受け入れられる、そう言う  
ところを言われているのではないか、それは純な少女の場  
合に於ては曲つた心が無いのでありますから、一切の世界  
をそのまますなおに受け入れて感ずることが出来るという  
処を言つたものでは無いかと思ひますのであります。善財  
童子はそういう童女を善知識としてその極く純なところに  
感じて行つたのでは無いかと思ひますのであります。

それからその王女は又次の善知識を教えますが、これか  
ら又南の方へ行くと一つの国がある。その国の名は三目、  
三つの目という、その国に妙見比丘めうけんひしうといつて出家の修行者  
がおります。その比丘の処へ行つて菩薩の修行を聞いたら  
よいでありますように勧めます。

### 一念一切世界

そこで善財童子は大変有りがたく御別れをしまして、別  
れた後の心の感じというものはあらゆる物事に就いて甚深  
深い所が味わえると言うような感じて行くのであります。  
菩薩の行ぎやくというものをよく考へて見ても非常に深い、それ  
から諸々の法の縁起えんぎ、一切世界の色々の物事の縁起、縁に  
よつて起る、この縁起という事を考へて見ても非常に深い

ます。そこへ善財童子ははいつてまいります。ところがそ  
の王女の宮殿というのが不思議な宮殿でありまして、その  
宮殿へ行きますと、一切の世界がごとく見える、つま  
り十方世界のあらゆるすがたと言うものがその宮殿の中  
にはいると見えて来る、こう言うのであります。そしてその  
王女の悟つている悟ごというのは般若波羅蜜普莊嚴門と  
言う、なかなかむつかしいのであります。般若波羅蜜は御  
承知でもありましようが智慧であります。智慧というもの  
が普く行き渡るようになつて、而もその智慧は非常に敵あだか  
な智慧が開けておるといふようなところの様であります。  
そして色々の陀羅尼だらにというものがかかつている。陀羅尼と  
申しますと前にも申したようであります。ある短い言葉  
に大事な事を縮めて口に唱えて心に感ずるといふのが陀羅  
尼であります。その種々無量の陀羅尼というものを心得て  
唱えるのであります。そして一切の人々に対してはその人  
々の心、その人々の行おこなに従つて丁度その人々の心によく響  
く様に説法する事が出来る。こういう有様である。そして  
自分自身が何処にでも自分の姿をあらわす事が出来る。そ  
して何時でも自由自在の妨さまたぎが出来る。こういう事なので  
あります。

こんな処をお経を読んでまいりますと、第一にこの王女  
はあるいは五・六歳かせいぜい十二・三歳と私は感じます

ものがある。それから一切衆生の言葉ことばを聞いて見ても非常  
に深い意味があるというように、深いもの深いものという  
事を感じながら行くのであります。

さてその妙見比丘に逢うて見ますと、その姿容が非常に  
敵あだかである、そしてその姿が非常に清い、丁度雪山を仰ぎ  
見るようである。雪山というヒマラヤ山であります。雪  
に覆われているヒマラヤ山を仰いで見ると非常に清いと感  
ずる。そういう感じがおこる。そしてこの比丘は諸根澄じよこん浄  
とあります。諸根と言ふのは、目耳鼻というようなもの  
であります。それが澄み渡つて、非常に静かに落ち着  
いている。その比丘に善財童子は菩薩の道を尋ねるのであ  
りますが、この比丘が一日一夜から七日七夜に至るまで梵  
行ぼんぎやうを修するといふのでありますから、じつと自分の身も心  
も清らかにする、そういう修行をするのであります。そし  
て申しますのは、

「自分は仏様の所で一小劫一中劫一大劫」と言いますか  
ら非常に長い時間であります——この非常に言うに言われ  
ぬ長い間妙なる法ほふを聞いた。菩薩の非常に深い妙行を円  
満する事になつた。それで自分は今ここを歩いています  
が、この歩いてはいる此処を離れずに、自分の一念、ひとお  
もいの中に十方の世界が皆悉く自分の前に現われて見え  
る。又自分の一念の内にあらゆる衆生の過去現在未來の有



様が悉く現われて見える。」  
こういう事を答えますのであります。

これも王女の場合とよく似ています。一念の内に一切十方世界がみんな出て来る、これは本当に私共が心を純粹にしたならばそんなものになるでありません。始終私共は心に雑念が起つて居りますから、なかなか一念の内に一切十方が悉く目の前に見えて来るという事になりませんのでありますけれども、心が純粹になればなる程そういう事が出来るだろうという事は思われます。でありますから前の王女の方はまだ幼い心の状態で一切が見えて来る。この妙見比丘の場合には非常な修行を積んで今の様な事になつて来る。そして前からよく繰り返されるこれが華嚴の世界の大事な所であります。自分の一念の中に於いてあらゆる衆生あらゆる世界の姿というものが皆見えて来る。實際私共が心を静めて考えて行きますところという所に行くだろう。自分がそこまで行つて行きますのでありますけれども、そういう所に行けるといふ予感位は持つ事が出来ません。そして又次の善知識を勧めるのであります。

### 砂遊びの童子

今度も亦南の方に行きますと一つの国があります。その国は田満多聞えんまんたもんという国でありまして、その国の中に都があらましてその都の名は妙門めうもんと言います。その都に今度は童

子、少年がおります、その少年の名は根自在こんじざいしゆというのであります。その童子を善知識として勧めるのであります。善財童子は又深い心を起しまして妙見比丘に別れて、又その童子を訪ねてまいりますのであります。そうするとこの少年は川の水際にいて他の色々の小供達と一緒に遊んでいまして、砂を集めて砂遊びをしているのであります。そうすると善財はその童子の所へ行つて菩薩行をききます。

これに答えてその童子はこういう事を申し上げます。  
「自分は昔文珠師利童子もんじゆしりどうしの許に於いて色々の事を学びました。数を算える事、算数と申します。又人間の姿容を見ること、そういう事を学び、それから色々の巧みな手技を習いました。でありますから医者いやくの事、文字に関する事、数学に関する事、それから薬に関する毒になるもの事、色々病氣を治療する事、その他建築の事から馬車を駆つて行く事やら、それから衆生の善悪の業、経済の事、沢山の八種類の巧みな手技を学びました。そして又人間の煩惱を治すと云うような事を学びました。その他又大きな数の事なんかも学んでおります。」  
と答えますのであります。

さあここを私考えさせられておりますが、目の前にその子供がやつている事は、川端で砂遊びをしている、それが今のような事を言う。これは子供の遊びというものの中に

あ

無限の道、無限の技わざというものが籠こもつていて、それが子供が大きくなれば一切の事にあらわれて来る。それで子供の遊びというものは決して無意味なもので無いと言ふような事を説き示されているように思ふのであります。少し失礼なお話のようでありませうけれども、私は精神分析しんぶんぶんなんかの研究をしている人の本を読みました時に、こういう事を

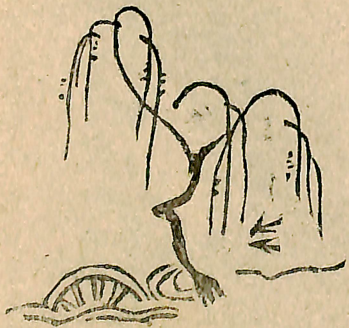
読んだ事があります。子供によつては悪い癖のある子供があつて、自分で小便をしながら自分の出て来る小便を弄もてあそぶという子供がある場合に、それを正面から「そんな穢きたい事をするな」、こう言つちやいけない。もしもそう言う少年があつた時にはその子供を導いて先ず泥溝どろぼりをさせる、そんな子供に限つて泥溝どろぼりを熱心にやるものだ。そして泥溝どろぼりを熱心にやるようになると自分の小便を弄もてあそぶ穢きたい事をしなくなる。それが段々進んで行くと、それが大きくなるとスエズ運河スエズ運河を開鑿かいはくするといふ大事業をやる事になる。それだから子供のやる事は導くとそういう風に發展して行くものだといふ事を書物で読んだ事がありますが、大変面白い事だと思つて覚えておりますが、つまり子供の戯れにやつている事の中に、その子供が将来大きな發展をして大きな仕事を成し遂げるその芽生えと言ふよりも種が含まれている、こう言う事を言つていいかと思われま

す。そうしますと、今の根自在主童子こんじざいしゆというものが今のよう

な事を言うのは、本当に人間の世界というものが少年時代に於いて将来色々に發展するものが、その遊戯の中に含まれている、こもつて居る。これが将来開けて来るのである。こう言う意味でこの童子の答える事が成程それは本当であろうと思ひますのであります。非常にここは面白いと思つております。

そう言う事を聞きまして善財童子は非常によろこびまして、この童子と別れ又その童子に教えられた次の善知識を訪ねますのであります。

続く





# 池山先生講話抄

松本解雄

万物流転する中において、心の立脚点は最も重大なる問題である。

頼む力、頼まるる力、頼ませ給う大御力に会うことはむづかしい。

その力は唯一無二で本来そう沢山あるべきものではない。但し世間には似て非なるものが非常に多い。

その力は、自分の力でない、又他の力でもない、また自然界の唯物の力でもない。

また単なる真理という抽象的なものでもない。また理念観念、悟り、でもない。

その力は、心であり、生ける心である。それは人間と同等、若しくはそれ以下の心ではない。人間以上の起人的心である。

さて人、即ち人格を離れて心は考えられぬ。天神地祇は

人口問題の起らぬ宇宙の最大の都は浄土である。

その浄土は、誰の為にでもない、特に私のために、私達のために作られたのである。

お浄土を作つて下さつた、たつた一つの心。その心には、見るからにぞつとする醜い人の心が、憂くるしい玉の心と見えて、「完全なる生ける人にしてやりたい」との願が長時不断の火と燃えている。

朽木は彫るべからず、糞土の牆は塗るべからず。手のつけようもない悪いものが、そのまゝひとりてに転化して、絶対完全の域に進むというなら、つじつまのあわない話だが、他から加わる威力によつて転成するのだとすれば、それば必ずしもあり得ないとは言えない。朱に交われれば赤くなる。甕も乗物にのせてもらえば、千里万里の遠きにも、やすやすと達することが出来る。その力の不可化のあらわれによつて、完全なものに転化される。

その力は、その一つなる心は、私共に呼びかける。

人間以上であるが、それは概念にすぎない。私には、キリスト教の神も実在とは考えられぬ、理念・観念の範疇に属する。

ありていに言えば、私には、超人的で、しかも概念的でない実在の心としては、唯一つてしない。すでにその心があるから無数の超人的心が実在としてうけとられてくるのである。

超人的、実在の心のはたらきを、和讃に

一一のはなのなかよりは 三十六百千億の

光明てらして朗らかに 到らぬところはさらになし。

一一のはなのなかよりは 三十六百千億の

仏身もひかりも等しくて 相好金山のごとくなり。

相好ごとに百千の ひかりを十方にはなちてぞ

つねに妙法ときひろめ 衆生を仏道いたらしむ。

とある。

しかし、何と似て非なる声の多いことよ。丁度奈良や伊勢に行くと、宿引き、土産売りが、あつちからも、こつちからも客に呼びかけて、客をひいていっているように。

けれども、問題は懐中如何による。懐中無一物の旅人はふりむくわけにいくまい。呼び手も見すてて了う。

ところが、ふところかげんがどうであろうと、どこどこまでも、相も変らずついで呼んで下さる心がある。

それは何と呼びかけているのか

「一心正念にして直に來れ」

「オネガヒダカラ、スグキテオクレヨ」

と。

人間の官能は、心耳は、それ自身その声を完全に捕捉することが出来ない。

なおまた心構えが出来ていない。

然し人生万事、縁の下の聴聞から、桐一葉、さらに愛別離苦等々、見るもの聞くものが、何時か私共に、その声が聞けるように力を合わせている。

人生の行路難に、右に迷い左に間違うが、その間違いを



通して真理を認識せしめられるように出来ている。

○ 心の主、その実在を心証することがむづかしい。

○ さとることは成る程でつとり早く行くように思われる。しかし、悟りはその経過が難しいし、又その先は心細いことではないかね。

○ よい先生に会うことが肝心である。

○ 法然上人……善導大師。親鸞聖人……法然上人。その師の心を通じて、実在の心にも接触し得られる。

○ 心の主の呼び声は、無数の人々の一人一人にちかに向つている。一人々々の主をもつ。異口同音の一人一人の声は、心の主の呼び声への回答である。

○ この呼び声は、頼む人と、頼ませる人をつつなく頼みの綱であり、ここに切つても切れぬたのもしさが萌す。

○ この声を聞く機縁のない人もあり、聞いても反感をもつ人もあり、馬耳東風と聞き流す人もある。

るい作用)という。

○ 自己の真相が知らしめられる極促に、呼び声のまことが知られる、これを呼び声の顕彰作用という。

○ お念仏もまんざら捨てたものではない、これは初めの段階である。

○ 「地獄への道はよき意図をもつて敷きつめられている」  
未来のことは、美しい理想の花で飾られているが、実際は、志ことと違つて地獄の道から逃れられまい。して見れば、呼び声が一番いゝと氣ついたところ、これが第二段階である。然しここでは相対的考えである。

## 永遠に亡びぬもの

— 一 科学者の信仰告白 —

私は親鸞聖人とひとつの信仰の世界に生かされている科学者のほしくれてあります。今から二十数年前、京大学生

○ しかし時節が到来するであろう。そしてその声を聞いた人、傾倒した人でも、受取り方は違うが、心の主との切つても切れぬある交渉は同じだ。

○ さて、その声を聞き始めてから、それが徹底するに三つの段階がある。それは、呼び声の価値を認める程度による。

○ それも捨てたものでもないという最底の評価から、これは余計な仕事ではない、なくてはならぬ仕事をしているのである、と知れるまでの段階である。

○ お互いの段階は何処か。

○ 虚心担懐の時には、ある意志のこもつた声を聞くと、同称同和する。それをくり返しているうちに、それがだんだん深く奥へ奥へと入り、遂にはその奥底へ徹せしめる。これを呼び声の自動作用という。

○ 呼び声の意味の深さが知れば、それに正比例して自己というものがわかつてくる。これを呼び声の精煉作用(ふ

○ 最後の手段が間に合わず、絶望の底に落ちこんだ時、呼び声が聞えて、思わず「オム」と返答するのが第三段階である。

○ 「引鉄は心で引く手で引くな」というのが射撃の秘訣だそうだが、心の上や、行の上で、ぎこちない力齧の見える間は、自然の妙境とは相去ること遠しである。

○ 「寒夜に霜のおくように」心の主の意図が身に沁みて、呼び声に返答せすにいられなくなつた境界、呼ぶ者と答える者がひとつにとろけて、呼びつ答えつ、答えつ呼びつこの声こそは、発して正鵠を失わぬものと言えよう。

東 昇

の頃「京都学生親鸞会」に身を託し、信仰運動に熱中した一時期があります。その頃に私が親鸞聖人の信仰をよるこ



ばせていただくに至る機縁をあたえて下さつた「よき人」は、当時大谷大学の独逸語の教授をしておられた、故池山栄吉先生であります。

あの頃から二十余年、今まで一度もこのような会（東本願寺の報恩講中の高倉会館の集會）で信仰の話をしたことありません。それには理由があります。ひとつには、私はひとりて喜び、この喜びを大衆に向つて説くという仕事の場にある者でないということ。もうひとつの理由は、眞宗信仰の世界を、誤解をまねくことなく多くの方々に向つて話すということは、やはりひとつの大きい仕事であつて、それはなかくむつかしいことなのであつて、このよな話の勧誘はおことわりしてきた次第です。私には仏教学、宗教学という学の知識は全然ありません。したがつてそういう意味では失格者です。にも拘らず話をするとするのは、何かがなければならぬ筈です。とにかく、このような立場にある者であることをあらかじめ述べておきます。

私は科学者の一人であると申しました。したがつて科学的であるとはどういうことかということをよく理解している積りです。然し今ここでは、立ち入つてこのことを話す場所でないので述べませんが、科学的ということの眞髓の把握なしでは私達の科学的研究は成り立ちません。

よ。私のよき師、池山先生の詠まれた歌を私はよく思い出します。

たのまるるただ念仏のわれにあり  
さるべき業はさもあらばあれ

私の日常はげんでいる自然科学という世界は、例をあげてもなく、日進月歩という言葉などあてはまらない程、ぐんぐん進んでおります。科学は科学者がよい方向にこれを進めるなら、勿論人類を幸福にする方向に進歩する。しかし科学の進歩に反して、人間の心のあり方は、昔とすこしも変らない。人間の不平不満、嫉妬心、羨望の心、等の煩惱具足の様相は、科学がどこまで進んでも、千年を通じて変わるところがありません。もうすこし人間は利口になつたらよさそうですが、このことばかりは全くどうにもなりません。これは科学の全く如何ともし難いところでもあります。科学的眞理の発見、科学の進歩によつて、芸術的世界が豊かになることによつて、又は単なる宗教的感情によつては、人は絶対価値の世界、無限の世界へ雄飛できそうに思われぬ、否不可能である。だが不断の努力はつづけられております。ここに眞宗の法を信じ、如来の本願を身をもつて聞かされるに至れば、人は煩惱具足の凡夫のまま絶対の世のよるこびに浴せしめられるのであります。

このような立場にある者が、親鸞聖人の極わめた絶対他力の信仰、ただ念仏の世界に至る道程を見ますと、実に科学的なものであると言いたいのです。到達せられたところは絶対眞理の宗教の世界であるが、到達への道程、とられた対度は、見るものによつては、見方によつては、心にくいまでに、実に科学的でさえあります。

聖人が立ち立てた浄土眞宗のただ念仏の世界は、体験を以て確認され、実践をもつて証明され、体験、実践の裏づけのない空論は、一言も口にされなかつたし、本としても書き残されなかつた。単なる主観でない、単なるひとりよがりではなく、客観的であり包摂的である。万人に共感を呼びおこさずには止まない。たまらない魅力をもつて私達をひきつける迫力があります。

聖人の到達されたところは、絶対眞理の宗教の世界ですが、そこに到達する方法、態度は科学的であります。聖人は科学的に進んで（この筆法誤解ないよう）科学の到達出来ない絶対他力の宗教の世界をきすぎ上げられた。七百年の昔から今日まで浄土眞宗の法灯ゆらぐことなく、生々脈々としている根本はこのようなところにあるのではなからうかと思ひます。

確信につらぬかれた聖人の日常生活態度を見よ。ゆるぎなき念仏のもと、何ものをも恐れなかつたあの勇氣を見

私は三日程前に実兄を亡くしました。物質的にみれば、二人の間には完全に遮断されてしまつた。また通常の心のあり方ではこの心はどうにもなりません。然し幸福なことに吾々はすでにひとつの絶対の世界に生きております。現実の生の世界ではすでに兄は私から永遠に消えてしまつたわけですが、二人は何時もお互いの世界に生きています。理窟をぬいたひとつの念仏の世界があります。この金剛の信は動くことなく、機縁にふれては静かに燃えあがります。決して若存若亡の如き浅薄なものではありません。

これは矢張り科学とは全然別の世界なのであります。

私達はいつかはこの世を去る時が来ます。医学は発達し、今日の日本では人生七十年といいますが、永遠の時の流れにくらべれば、私達の生はほんとい瞬の夢にすぎません。私達にいつかは必ずおとされる一大事、死に直面した時、力となるものは何もありません。一切頼りにならない、ただ念仏ひとつが力なのです。私の身につけている若干の地位や肩書き等は、私のからだに亡びると同時に、いや時にはその前に亡びてしまいます。ただ絶対安心の世界に生きさせてもらうことでは、この身は亡んでも永遠に亡びないのです。これひとつは一番の私のしあわせであります。私達はいろ／＼な宿縁によつてそれぞれ違つた境遇におかれますが、それを越えてみなひとつになる世界があるということとはまことにありがたいことなのであります。



# 善と悪との問題

花田 正夫

昔、中国に鳥窠禪師ちようかぜんしと呼ばれる大徳がありました。名は道林、九歳出家、道欽禪師に謁して大悟。その後秦望山の松の木の枝葉の繁茂して蓋となつてゐるのを見出し、その上に坐禪を続けたので、時の人が、鳥窠禪師と称しました。その頃、詩人の白樂天はくらくてんが杭州の知事に赴任し、仏道を求めて禪師をたずね、開口一番、

「禪師、そこは甚だ危険ではありませんか」

とたずねると、

「太守の危険もつとも甚だし」

と、あべこべに見舞われたので、

「弟子の位山が黄河を鎮めて居りますから、何の危険もありません」

と、言葉をかえすと、禪師は語氣も強く

「煩惱の薪たきこが燃えさかり、識性しきせうはうろく／＼しているではないか。それこそ危険千万……」

と。この一語に、白樂天の眼は、自分の脚下を省みさせられたのであります。徒らに外ばかりむいていた眼が内に

向けられたのです。このことは、求道の出発しゅたうにおいて非常に大切な問題であります。

嘗て菅瀨秀英師が痛疾で入院中「わしが不治の病になつて気の毒なといつて見舞うて下さるが、見舞うて下さつた人でわしより先に死んだ人もある。自分は大丈夫で病氣のわしばかりが死ぬと思つてゐる人にこちらから御見舞申す」と言われたさうであります。誠に省みさせられることあります。

そこで白樂天は、大いにうなずいて、次に

「仏法の大意をお教え下さい」

と申すと、禪師は即座に

「諸悪を作すなかれ、衆善を奉行せよ」

と。あまりの平凡な言葉に、白樂天は更に

「そういうことは三歳の童児も、よく道うことを知つて居ります」

と言葉をかえすと、禪師は大喝されて

「三歳の童児の道うことを知つてゐるのに、八十の老翁

になつても実行の出来ぬのがこの一事だ」

と。さすがに白樂天も、かえず言葉もなく、叩頭して、それから教を常に受けたのであります。

## 善悪のふたつ

さて、衆善と云い、諸悪というが、一体何が本当の善であり、何が本当の悪でありましょうか。

時代が移れば判断がvari、場所が異なればまた移り変わる、個人の上でも、青年、壮年、老年と、年と共に思考は変遷して行きます。私共の言う善悪は、その時、その場の自己を中心とした判断で、その不変性は保証されません。私の学生の頃読んだ哲人の隨筆に

「或朝、蜘蛛の巣にかかつてもがいている蜻蛉とんぼを見つげ、早速たすけて大空に放つてやつた。蜻蛉はやがて青空に消えたが、真黒い大きなダンゴ蜘蛛が、怒りに満ちた形相で、破れた巢を思いきりゆさぶり続けていた。……はて、自分のしたことは果して善だつたのか？」

とあつた。又同じ頃、印度のタゴール翁の小詩に

「燈火よ、何故に消えた。

お前を風から防いでやろうと

マントで覆うてやつたのに

お前は何故に消えた！」

とあるのも、感銘深く心に残つて居ります。

然し、そのことについて、何よりもはっきりと教えられたのが、親鸞聖人と聖徳太子の次の御言葉であります。

「聖人の仰せには、善悪の二つ総してもて存知せざるなり。その故は、如来の御心に善しと思召すほどに知り徹したらばこそ、善きを知りたるにてもあらめ、如来の悪しと思召す程に知り徹したらばこそ悪しさを知りたるにてもあらめ、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもて、そらごと、たわごと、まことあること無きに、ただ念仏のみをまことにて在あします」

と歎異抄にあり、御和讃の結び、聖人御著書の最後に、

「よしあしの文字をも知らぬひとはみな

まことのころなりけるを、

善悪の二字知りがおは大それごとのかたちなり

是非知らず、邪正もわかぬこの身なり

小意小悲もなければ、名利に人師このむなり」

と書きおさめて居られます。聖徳太子は

「……我かならずしも聖ひたりにあらず、彼かならずしも愚とろにあらず、共にこれ凡夫のみ、是みし、非あみするの理ことわり、なんぞ能く定むべけんや。……」

と明らかに誠めて下さるのであります。

ここに、世の中には、是非もなく、善悪もないという無秩序だということなしに、秩序は整然と存するも、私共



が見る力のない盲人であり、知る力のない愚者であるといふことを決定的に知らされるのであります。

### 仏教の実行

さて、鳥窠禪師の勧められる「衆善、諸悪」とは一体何であろうか。出発点に再び帰りますのに、禪師は仏道の体解者であります。して見れば、その指さされる善悪は、仏陀の教でなければなりません。

眼を仏界に転じます時、そこに仏陀はすでに、我等の根機にに応じて、三つの道を説かれています。

第一に、苦・集・滅・道の四聖諦であります。即ち、人生到るところ四苦・八苦がみち、三界は安きところもないということを見れば、その禍根は無尽の煩惱にありと知り、その煩惱を滅してさとりを得る道であります。然しその教に照されて見れば、夢を夢と口しながら、人生を夢なりと大悟出来ぬ身の姿で、「煩惱深くして底なく、生死の海ほとりなし」との歎きを繰り返すばかりであります。

第二に、十二因縁の諦観。無明、心の暗さからあらゆる惑いをおこし、更に愛欲にひかれて愛の断ち難く、生老病死の苦海に沈みきつて浮ぶ瀬のない、鈍根、劣機、強剛難化の身が照し出されるのであります。

第三は、六度の行。これは一切の菩薩の行であります。自利、利他満足の道であります。即ち、布施、持戒、忍

に、その心ひるがえつてくらし。朝々に定めて悪趣に沈まんことを恐怖す。夕々に出離の縁の欠けたるを悲歎す。忙々たる恨には渡に船を失うが如し。朦々たる憂には闇に道に迷うが如し。」

同時に、善導大師の仰せ

「深く、自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、常に没し、常に流転して、出離の縁あることなしと、信ず」

と。嗚呼、何人かこの大師の金言の前に、頭を上げ得るものがあるうか。

### 本願の意趣

祖師聖人は、

「煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死を離るることあるべからざるを、憐みたまいて、願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり。」

と、救いなき身の救いのひかりを、我御身にかけて仰せ下さるのであります。聖徳太子は

「篤く三宝を敬え。……それ三宝によりまつらば、何をもつてか枉れるを直うせん」と、お勧め下さるのであります。

善導大師は、二河の譬をもつて、仏意をそのままに

辱、精進、禪定、智慧の行であります。仏弟子阿那律は、修行中に居睡りをし、仏の御叱りをうけて、遂に盲目になるまで休まず、視力を失うて、心眼を得たと伝えられます。これ精進の行の一例であります。徹底した行は我々にいよいよ高根の月で及びもつかぬことであります。

仏陀は、万行、諸善の実行出来ぬ者のために、一行を選んで行え、一行に徹すれば、万行はおのずからとける、と教えられるのであります。大海の潮の塩味は、全部を飲まなくても、一掬で全体の味を知ることが出来るのです。

仏教二千五百年の歴史を通じて、一行に徹しようと血まみれの精進を続けた人々が沢山あります。その道は身近かで易いようであります。行けば行くほど、行路難にならずむばかりであります。西田哲学ではこれを逆対応と呼び、真実に近づこうとすればする程、真実ならぬものが発見されて来ると説いて居ります。

### 永遠の流轉

嗚呼、我が道絶えたり、嗚呼、我が力尽きたり。白黒もわかぬ盲人、微塵も動けぬ業繫の囚人。そこにはとこしなえの流転と漂没があるばかりであります。ここに四十三歳の法然上人の悲歎の片鱗にふれる。

「法は深妙なりと雖も、我が機すべておよび難し、經典を披覽するに、その智もつとも愚なり。行法を修習する

「西岸上に人有りて喚んで曰く。汝一心正念にして直ちに來れ。我能く汝を護らん。すべて水火の難に墮することを畏れざれ」

と。蓮如上人はねんごろに、

「阿弥陀如来の仰せられけるようは、未代の凡夫、罪業の我等たらんもの、罪は如何ほど深くとも、我を一心にたのまんものは必ず救うべし。」

と、流行病が蔓延して死者が続出した時節にあたって、悲心切々と燃えて、弥陀即上人、上人即弥陀と顕現されての御勧めであります。

### 信心と疑情

救いなき身の救いの力はここに現われて下さるのであります。現われて下さるどころではありませぬ、私のためにあらわれて下さったのであります。何という慶びであります。ようか。千仞の断崖におちこんで、よじのぼる途もなく、力も無い者に、不思議にも、唯一の救いの綱がおろされたのであります。唯信心の手をのべて、本願の綱をとる一つに、菩提の岸に上げられるのであります。

ここに、煩惱具足の私共には、善悪の道はすべて閉じて、残るは、信心か、疑情か、にかゝるのであります。

蓮如上人は「聖人一流の御働化のおもむきは、信心をもつて本とせられ候」と説かれ、「善知識の悪しといは信



新春法信抄

京都市 白井成允  
みほとけのみちかひひろしみひかりのてらさ  
ぬくまはよになかりけり

愛知県 鈴木橋村  
待までの初曉闇の負真綿  
凍鶴に日のおよぶときかうと啼く

福岡市 和才誠司  
ほのぼのと明けて涅槃の春うら  
おろかな身にも生甲斐おほゆ

岐阜県 飯塚さだ  
初春を迎えて今日も靈光の天のうぶ湯にひた  
る癒しぎ

大地よりふしぎにわき出る靈泉に身心満たし  
て大地をうるおす

鹿兒島県 柚木ぬき  
若水に心うつしてかえり見るみだのめぐみの  
いかに深きを

島根県 三瓶徳英  
北枕面を西のふしどにて除夜の鐘聞き八十に  
なりぬ

福江市 長田智竜  
釈迦弥陀の大慈大悲を祖師に聞き南無阿弥陀  
仏と初日を迎う

いくたびかおともいまだいつ人の世のつづら坂  
みちあけられてゆく

東京都 日下部 智  
三界にわれ一人、西岸に声のきこゆる

滋賀県 園 憲 章  
……事多き一ケ年を過ぎ、今新春を迎えて雲

水の如く、業の間に間に、またしても一生造  
悪です。値弘誓の御指雨を下さい。

東京都 高橋 賢一  
……除夜の鐘を雨声とともに聞き、元朝は雨

あがつて、庭前の紅梅、二、三輪ほほえむ。  
春枝頭の趣十分です。

山口県 松村 繁雄  
南無仏と呼んでもうて明けの春

裸木停つ岩の皸裂の寒きびし

愛媛県 木村 誠一  
はかりなき命たまにしみ仏のみ名となえつ、

道を歩まむ

岩手県 八重樫 福治  
煩惱もいくらか休む初日かな

京都市 榊原 徳 草  
業海流転六十年親仰無量光寿尊

鹿兒島県 法山 竜 夫  
万象に光尊し今朝の春

東京都 柳 瀬 習 治  
……私はこの二日を以て満六十八歳になりま

した。人生暗胆たる老を感じ、いよ／＼唯念  
仏の外なきを痛感します。この念仏あつて新  
年の喜びと致すのみであります。

年祝きに何はまほさむ念仏に生さる喜び祝き  
言とせむ

福井市 西 島 泰 英  
こぞことし境は除夜の鐘一つ

秋田県 小 谷 慈 穂  
みおやまつ里とおからずいかまばやくての  
やまじよしけわしとも

名古屋市 山内 順 徳  
そのままのお慈悲なりけり老の春

京都府 山村 信子  
み名となうことありがたし豊の春

山口県 平岡 政 信  
逃げまどうわれを憐れみ何処までも呼びかけ  
給うみ仏の声

岐阜県 多賀 重 治  
歳且に芽出度きものは念仏かな

東京都 中野 駿 太郎  
私は大正十三年の晩秋、近常観先生のお

導きにより、仏陀の慈悲を知らせて頂いて安  
心いたしました。それは煩惱の起るたび毎に、お慈  
悲に気づかせて頂けば信仰の境地に戻り得る  
のですが、それが早く帰れないので悩んだの  
です。然し昨今や心の安定も得られたかと  
思います。今年も少しでも、この身を仏法の  
お役に立てたいものと存じております。

愛知県 中 島 彰 悟  
災害の堂にもはえて初あかり

偶 感 筆 竜 観

なきをいうなり」とも申されています。又年頭の挨拶に出  
た専修寺村の道徳に「道徳いくつになるぞ、道徳念仏申さ  
るべし云々」と直諫され、歳末の礼にまかり出る同行方に  
「無益の歳末の礼かな、歳末の礼には信心をとりて礼とせ  
よ」と誠めていられます。

親鸞聖人は、仏智疑惑和讃を二十三首まで作られ、その  
最後に、

仏智疑う罪深し この罪思いしるならば  
悔ゆる心をむねとして 仏智の不思議たのむべし  
と結んで居られます。この聖人の御眼には「道なき道に分  
け入りて、無き慰めを尋ねわび」る者への無限の御涙があ  
ふれて居ります。

おもうに、煩惱具足の凡夫として、何が悪い、何が罪が  
重いと云つても、最大・最重・最深の罪悪は、仏願のま  
たを疑惑することでありませう。仏願を信ずるか、疑うかが  
人類に光が射すか、射さないかの分水嶺であります。

聖人はそこに、満腔の悲心をもつて「仏智の不思議たの  
むべし」と絶叫せられているのであります。

一月末日、一道庵にて。

私は何時も年の暮になると思い起す『御文』がある。  
「それ秋も去り春も去りて年月を送ること昨日も過ぎ今日も過  
ぐ、いつの間にかは年老の積るらんとも覺えず知らざりき。然  
るにそのうちにさはりとも、或は花鳥風月の遊にも交りつら  
ん、また歡樂・苦痛の悲喜にもあいはんべりつらんあれども、  
今にそれと思ひ出すこととは一つもなし。ただ徒に明し、徒  
に喜して老の白髪となり果てぬる身の有様こそ悲しけれ。……」  
これについて、蓮如上人の様に、真宗復興のため文字通り身を粉  
にし骨を砕いてこの大事業を遂行せられたのに、吾が身を省みら  
れては「徒に暮して老の白髪となり果てぬる身の有様こそ悲しけ  
れ」と言つておいでになることである。

尤も御一代聞書に「功成り名遂げて身退ぞくは天の道なり」と  
云つておいでになることを見ると、上人も凡夫並みに名譽心にか  
らまる自己満足を感して居られた様で、この二つの相反した言  
葉は如何にも矛盾した様に思われるが、上人にあつては、この相  
反したお気持が、法の世界で一つに融けて何の矛盾もなくなしま  
したようである。

世間並には「功成り名遂げて……」の自己満足も、如来大悲の  
法の鏡に照らされては、いかなる私事を抜きにした大事業遂行も  
「徒に明し徒に暮し」という自己懺悔となるのではなからうか。  
ひるがえつて私自身を省みると、一つとして私自身を抜きにし  
て行爲したことのない私である。それでいて何時も大きな顔をし  
て、我独り善しとすまし切るのである。全くお恥し限りであ  
る。然しこう言つた私の上にこそ、弥陀大悲のみ光は輝き給う。

御勿体ないことではないか。  
無慚無愧のこの身に  
弥陀廻向のみ名なれば 功徳は十方に満ちたまう  
との聖人の悲歎迷懷和讃がいよ／＼仰がれる、

以上



# あとがき

二月は名古屋地方では一番寒い月にあたります。然しこの月は、二月十五日は仏涅槃の日、二月二十二日は聖徳太子の忌日であります。きびしい寒さにつけ、いよいよ仏恩の深きを仰ぎ、太子の御恩の篤きことを憶うことでありませう。

△宿業論は、仏法を聞く人の皆深く考えさせられることであります。仙台中の生徒の遭難事件を縁とされて、近角先生の悲心がそこに点火し、歎異抄十三章の思召しを体験の上に御説き下さいました。二回か三回に分けて頂きます、御精読下さい。

△善知識を訪ねて行く善財童子の求道魂に、福島先生のお導きによつて、触れさせて頂きます。真実の求道は、自分の小知浅才をたよつて歩む旅ではありません。

それは漂流であり、彷徨であります。善財童子は、文珠の智慧にうしろから照らされて、そこに眞の知識を見出されるのであります。幾度か驚き怖れ、幾度か顧疑しためらう中を、文珠の知恵に導かれて行く姿は、攝取の心光に照識されて迎る念仏者の無碍の白道を信味させて頂ける、尊い燈火であります。

△池山先生の講話筆録は松本解雄さんが大切に筐底に持つていられたもので、昨秋の一道会で朗読して下さつたものであります。成るべく仏教の専門語を使われず、

仏の女意をお説き下さつたものであります。平素仏語に親しんでいられる方には反つてお解り難いかも知れませんが、そうでない方には身近に読みてつて頂けるかとも思ひます。

一句、一句に、先生の心意気の溢れるものがあります。但し私がすこし筆録に加筆しまして疵なき玉に疵を加えた点、御海容願います。

△永遠に亡びぬものは昨秋の東本願寺の報恩講の時、京都の高倉会館で、東さんが話されたもので、中外日報に出ましたのを、東さんにお願ひして頂きました。京大で医学を講義していられますが、池山先生の晩年に師事された方でありませう。

△善と悪との問題、大方の御叱声をたまわりますように。  
よしあしの中を流るる阿弥陀川  
詠人不知

一月廿一日、三河の半田さんが久方振りに来歴下さり、その節、昨秋兄さん(幼時から足の不自由な方)が六十で亡くなられ、その時の模様を次の様に語られました。

「兄は足が不自由なばかりでなく、頭も十分ではありませんでした。亡父が三反程の田地を食い料に与えて居りました。そうした人間でしたが、何時聞きましたのか、仏法を一筋に聞きとつて居りました。死の近い日、八十過ぎた母が、死んだらどうするか、ときぎますと、おらはなあ、足が悪う

て歩けんが、大願の船に乗せて貰うて、間違いなしにお浄土に生れる、ときつぱりと答へました。やがて又寝たユが痛い／＼と言つていました時母が、そんな痛い／＼とばかり言わずに念仏せよ、と申しますと。おらはなあ、痛いので親様を忘れるけれど、おらが忘れて居ても、忘れて下さらぬ親様が御座るんで、無理に念仏せんでもいいわい、と答へました。一番気の毒な兄でありましたが、信仰の上では一番幸福者でした。……と。

年頭、まことに心洗われる法味でありました。  
第一、二、三日曜の例会。午後一時半。一道会館。その外は二月も休ませて頂きます。私の病氣も次第に恢復して居りますが後藤院長の指示に従つて居ります。御放念下さい。 聚墨生

定価 一部 二十円(送共)

半年 百二十円(送共)

一年 二百四十円(送共)

名古屋市南区野上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷 人 本田 政雄

名古屋市南区駄上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番